

【特集】

軍都宇都宮の誕生

栃木県歴史文化研究会 下田 太郎

明治40（1907）年9月に宇都宮へ陸軍第十四師団（以下、「第十四師団」と表記）がやってきて以降、北関東を表する軍都として宇都宮は発展してきました。では、どのような経緯で宇都宮に第十四師団がやってきたのでしょうか？

陸軍の編成と兵科の配備

明治新政府によって新たな国づくりが進められていく中、近代陸軍の創設は喫緊の課題のひとつでした。明治4（1871）年8月（旧暦）、

国内警備を目的とした四個鎮台（東北「仙台」・東京・大阪・鎮西「熊本」）が設置されると（のちに名古屋と広島が追加）、宇都宮県と栃木県（いずれも当時）は東京鎮台の管轄下に置かれました。当時、各鎮台には四個の歩兵聯隊と騎兵・砲兵・工兵・輜重兵（軍需品の輸送

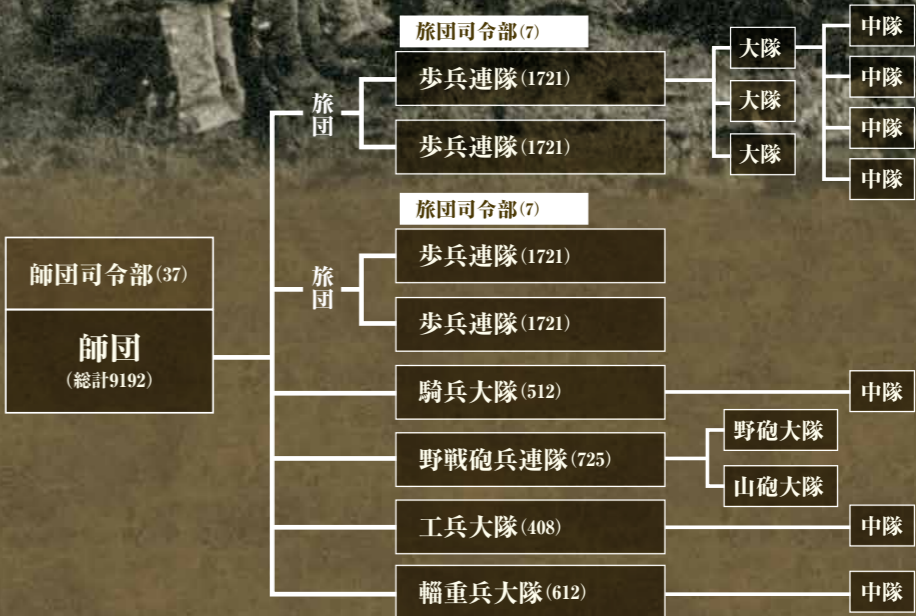


図1 師団の編制と定員 (松下孝昭「軍隊を誘致せよ」掲載図を元に作成)

※カッコ内はそれぞれの部隊構成人数

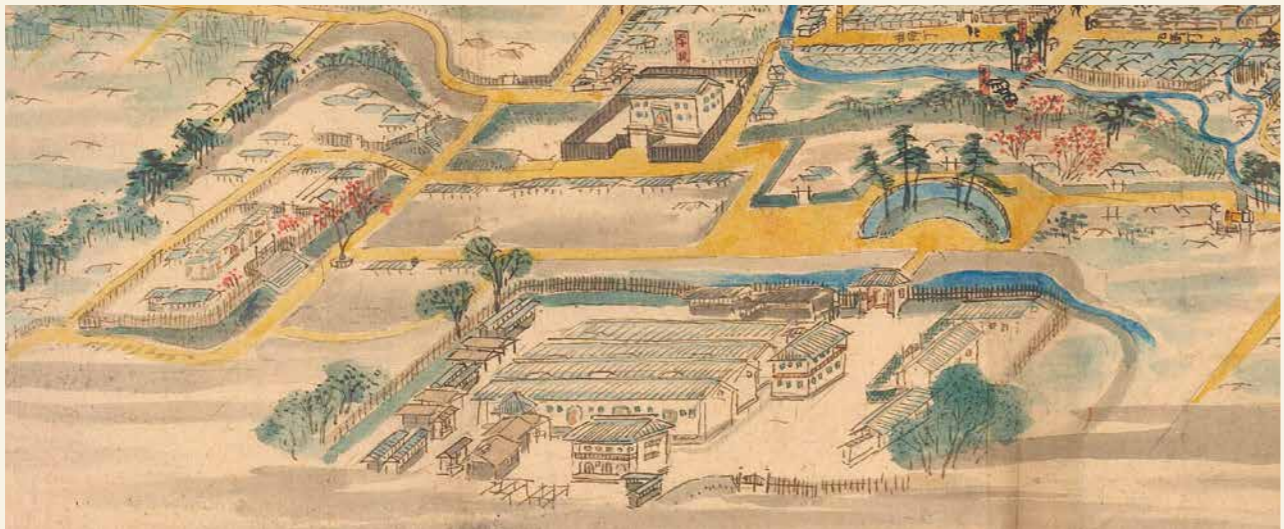


図2 下野国河内郡宇都宮市中略図(部分) 明治6年、菊地愛山筆
栃木県立図書館蔵。右より中央、三日月堀の下の三の丸跡にある建物が明治5年末に建てられた歩兵第七番大隊の兵舎跡。

二個が組み合わされて一個の旅団を形成し、どちらかの聯隊駐屯地に旅団司令部が置かれました。なお師団衛戍（陸軍軍隊がひとつの地に永久に配備駐屯すること）地には、二個の歩兵聯隊と特科部隊を置く原則がありました。つまり師団がやってくるということ

宇都宮への軍隊駐屯のはじまり

宇都宮と近代軍隊とのかわりには、明治5（1872）年11月（旧暦）、第一軍管第二師管第四分管歩兵第七番大隊が宇都宮城跡に駐屯した時からはいまじりです（図2）。翌6（1873）年1月、太政官から達として陸軍・大蔵両省に発せられた二つの文書（総称して「全国城郭存廢ノ処分並兵營地等撰定方」）で、これまで陸軍省の所管だった宇都宮城跡は引き続き軍用財産として陸軍省が

所管することとなります（存城処分）。そして明治7（1874）年3月、千葉県印旛郡佐倉町（現・佐倉市）を営所（兵が居住しているところ）とする歩兵第二聯隊が新設されると、宇都宮駐屯の歩兵第七番大隊は歩兵第二聯隊第二大隊（以下、「第二大隊」と略）に改編されます。6月には聯隊本部が佐倉から宇都宮城跡へ移設されますが、翌年5月に宇都宮から再び佐倉へと戻りました。

その後、第二大隊は明治10（1877）年の西南戦争に出勤した後、明治16（1883）年12月に改正徴兵令が公布されると、一連の軍備拡張で第二大隊は居場所を失い、翌17（1884）年6月に佐倉へと移駐しました。以降、明治40年の第十四師団衛戍までの間、宇都宮に軍隊が駐屯することはありませんでした。

軍隊がいなくなった宇都宮城跡はその後、「人民へ貸渡」（家屋はなし）されていましたが（『武大日記』明治22年8月）、明治23（1890）年2月、陸軍省から旧藩主の戸田家へ払い下げられました（『伍大日記』明治23年2月）。その後、戸田家は半分以上の土地を旧士族への貸し渡しと宇都宮町民への払い下げをし、濠の多くが埋め立てられ、道路や宅地となりました。旧本丸については、明治30（1897）年頃「公楽園」と称し公園のように利用されました。

師団誘致の実現に向けて

さて、宇都宮への師団誘致の動きは、日清（明治27・28「1894・95」年）・日露（明治37・38「1904・05」年）両戦争と密接にかかわっていました。その背景には、陸海軍による大規模な軍備拡張がありました。

まず日清戦争後、陸軍は六個師団の新設を決め、秘密裡に候補地の調査・選定を行っていました。明治29（1896）年5月、栃木県は宇都宮市長から師団誘致の要望を受けて、県知事名で陸軍大臣へ上申書が提出されますが（『武大日記』明治29年6月）、この時すでに参謀本部内で師団配置計画（「陸軍常備部隊配備表」原案）が作成（明治28年12月頃）され、宇都宮のある関東地方は候補地に含まれていませんでした。

そして日露戦争直後の明治38年秋頃から、各地で再び師団誘致の動きが出てきました。11月、宇都宮市長名で師団設置を求めの上申書が陸軍大臣宛に提出されると（『武大日記』明治38年11月）、翌12月には栃木県会で「師団設置ニ関スル意見書」が知事宛に提出、翌39（1906）年11月にも再び「師団設置ニ関スル意見書」が知事宛に提出されました。そして12月に招集された第23回帝國議會で、日露戦争中に臨時編制された四個師団（第十三、十六師団）を常設化した上で、さらに二個師団を新設し、合計六個師団を増設する方針が固められました。



図5
兵庫姫路から移ってきた騎兵第十八聯隊 (個人蔵)



図6
宇都宮衛成病院 (個人蔵)



図7
第十四師団司令部 (個人蔵)

図8 国立病院機構栃木医療センター南西敷地に遺る第十四師団司令部の赤レンガ門 (増田俊雄氏撮影)

第十四大隊(渋谷↓河内郡城山村「現・作新学院」)がそれぞれ編制されました。

明治41(1908)年3月末に、各部隊に先立って歩兵第六十六聯隊が宇都宮へ到着・入営、4月には宇都宮陸軍衛成病院(図6、現・独立行政法人国立病院機構栃木医療センター)が創設され、10月には陸軍衛成病院南側に師団司令部が建てられました(図7・8)。またこの年、師団

司令部から野戦砲兵第二十聯隊の兵営を結ぶ軍用道路(のちの桜通り)が整備されました。そして11月には師団司令部の開庁式が行われ、併せて栃木県知事を会長、県内務部長と県会議長を「副長」とした軍隊歓迎会が催されました。当日は宇都宮二荒山神社前に緑門(祝賀の際などに建てる、常緑樹の葉で包んだ弓形の門)を設置し、「剣舞、手品師、大神楽、関白獅子舞」などで入営する兵士たちを歓迎。当時の新聞記事を見ますと、当日は兵士

たちに「日用品は特別の割引にて販売し、飲食店では食事を「格安」で提供したそうです(『下野新聞』明治41年11月13日)。

ちなみに、徴兵・召集については陸軍管区表で定められていました。第十四師団歩兵聯隊の場合、第二は水戸連隊区(茨城県全域)、第十五は高崎連隊区(群馬県全域)、第五十九は宇都宮連隊区(栃木県全域)、第六十六は熊谷連隊区(埼玉県中部)「大里・比企・入間・児玉・秩父郡」が兵事(事務)を行なっていました。

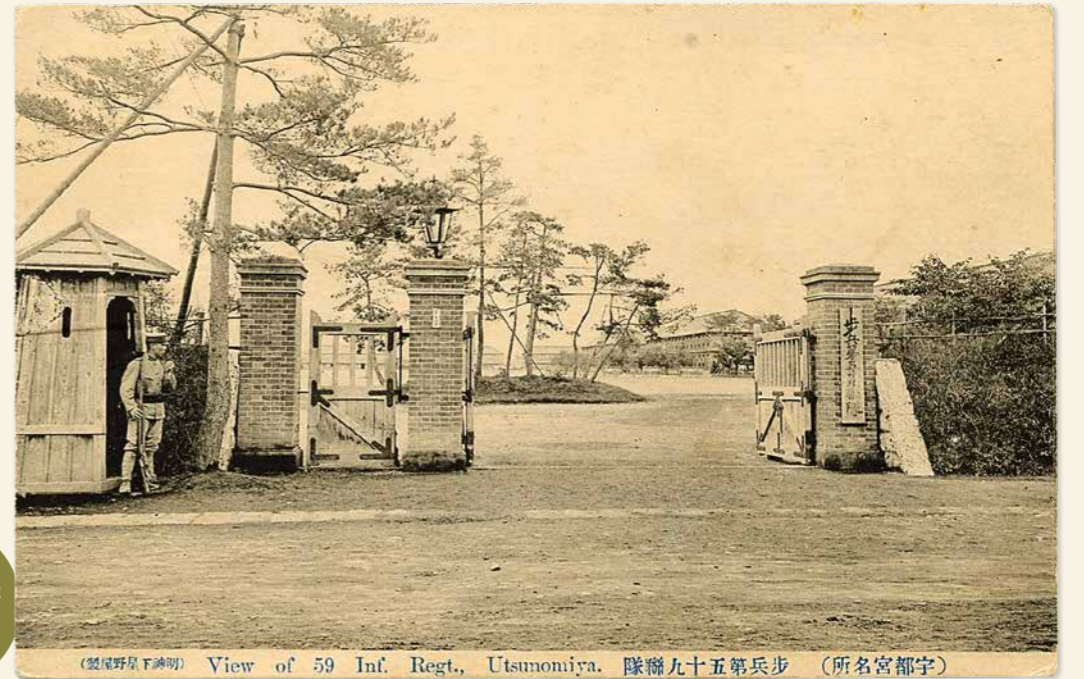


図3
歩兵第五十九聯隊の営門。奥に兵舎が見える (個人蔵)



図4
歩兵第六十六聯隊の分列式 (明治40年・筆者蔵)

明治40(1907)年9月、「陸軍常備部隊配備表」(改正)が発表されると、第十四師団の衛成地に宇都宮(河内郡国本村・城山村・姿川村)が正式に決定し、宇都宮市は念願の師団誘致に成功しました。約40万坪(約132ヘクタール)余の広大な軍用地は、県民からの寄付で確保したそうです。また、県知事名で県内各都市に敷地買上げにあつての割当額が決められ、5万円という高額に設定された宇都宮市では、師団敷地買収費の寄付を募ったところ、設定金額以上となる5万5327円30銭(GDP換算で約1億5400万円相当)が集まったそうです。

第十四師団は日露戦争中の明治38年4月に師団動員令が下され、福岡県小倉市(現・北九州市)で編制されました。7月に満州(現中国東北部)に出動し、奉天(現瀋陽)以北の警備任務にあたり、その後は兵庫県姫路市の第十師団と交代・帰還、第十四師団は姫路に臨時駐屯しました。

衛成地に宇都宮が決まると、第十四師団の管轄下に、第二(水戸)・第十五(高崎)・第五十九(習志野↓河内郡国本村「現・ポリテクセンター栃木周辺」、図3)・第六十六(新設、河内郡国本村「現・県立宇都宮中央女子高等学校など」、図4)の各歩兵聯隊と、騎兵第十八聯隊(姫路↓河内郡城山村「現・作新学院」、図5)・野戦砲兵第二十聯隊(姫路↓河内郡姿川村「現・文星芸術大学附属中・高等学校ほか」)・工兵第十四大隊(水戸)・輜重兵

第十四師団、宇都宮へ



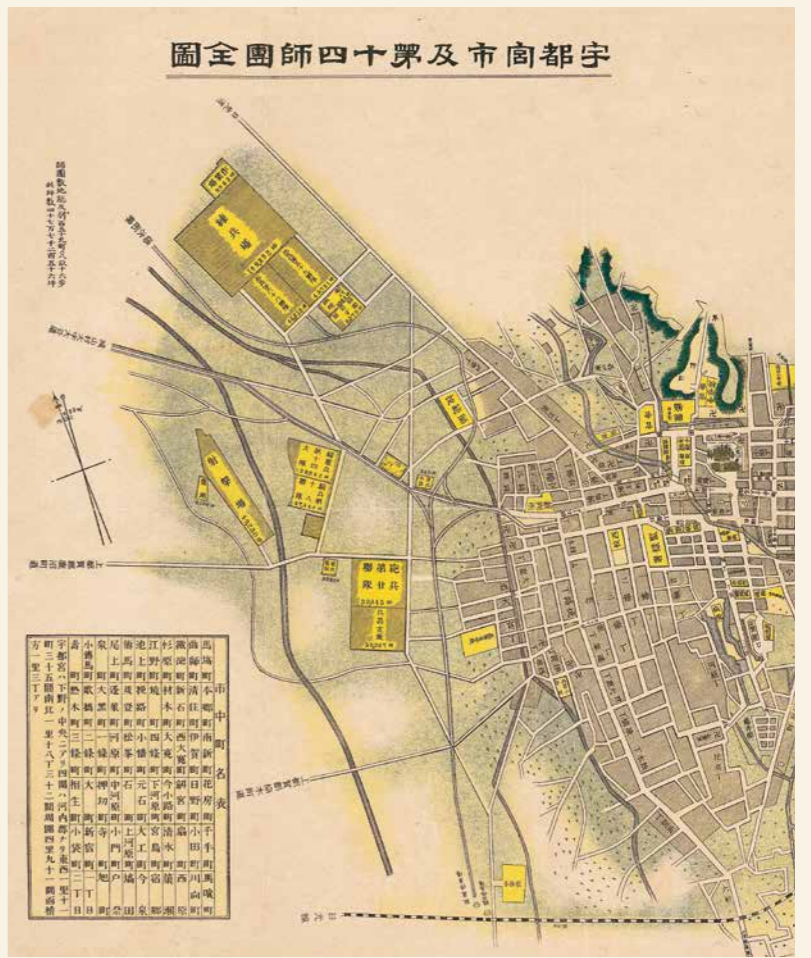
図10 酒保（兵営内にある日用品や飲食物を扱う売店）でくつろぐ野戦砲兵第二十聯隊の兵士たち（筆者蔵）

特別大演習）が4度（明治40・42「1909」、大正7「1918」、昭和9「1934」年）行われたことは、首都東京と東北をつなぐ結節点として、宇都宮が地政学上重要な位置を占めていたことを意味していました。

では、第十四師団が宇都宮市にもたらした経済効果ほどの程度だったのでしょうか？明治44（1911）年、宇都宮商工会議所が調査したデータによりますと、師団全体での年間経費242万6682円（約69億8800万円相当）のうち、宇都宮駐屯経費が156万3002円（約45億円相当）で、そのうち直接宇都宮市内へ落ちる金額が74万8503円（約21億5500万円相当）で、宇都宮駐屯経費の約48%を占めていました（図10参照）。このほか、第十四師団に所属している兵士たちが市内の飲食店や遊廓等へ落とす金銭、入退営兵の見送り、面会人などといった間接的なものを含めますと、この金額以上の経済効果が宇都宮市にもたらされたと考えられます。

師団廃止の危機

ところが、大正11（1922）年からはじまった軍縮で、大正13（1924）年8月、第十六師団（京都）を除く第十三から十八までの五個師団が廃止の対象であると新聞で報じられました（『下野新聞』大正13年8月5日夕刊）。これを受けて、宇都宮市長は市会や市経済界の関係者を招集・協議の上、同



宇都宮市街と第十四師団全図（部分、明治42年、個人蔵）

師団衛戍の背景と経済効果

ところで、陸軍は「兵営地撰定に関する方針」の中で、師団や聯隊設置にあたっては「…可成運輸交通の利あり給養に便なること」と明記していました。多くの兵士が生活する兵営にとり、必要な食糧や物品の調達（給養）が兵営地の近くでできるかどうかは重

要でした。宇都宮の場合、古くから門前・宿場町として賑わっており、交通の要衝地として、給養地としての好条件が揃っていました。

またロジスティックス（兵站）の観点から見ると、鉄道が師団衛戍の重要な要因として見えてきます。宇都宮の場合、明治18（1885）年に日本鉄道第二区線（現JR宇都宮線）が宇都宮まで開通し、日清戦争開戦時までは歩兵第五聯隊（第

二師団）が駐屯する青森まで延伸していました（図9参照）。軍備拡大による師団増設を目論んだ軍部とすれば、鉄道はロジスティックスの迅速化を促すとともに、陸軍の軍事拠点（師団衛戍地や軍港など）を鉄道によってネットワーク化させることで、軍隊を効率的に配備し、有事時には一度に多くの兵士たちを輸送する狙いがあった訳です。そして第十四師団衛戍後、栃木県を舞台に大規模な軍事演習（陸軍



図9 日清戦争開戦時の鉄道網（松下孝昭「軍隊を誘致せよ」掲載図を元に作成）

年8月と9月に首相や陸軍大臣、参謀総長を訪問し陳情書を提出します。当初、第十四師団の廃止は既定路線でしたが、「師団分布上不公平」をなくし、また「一県下には両師団の必要」がない等の理由で、二個師団が衛戍していた愛知県、その中の一個師団である豊橋市の第十五師団が廃止され、第十四師団は廃止を免れました。しかし、一連の軍縮により歩兵第六十六聯隊は廃止されました。

この軍縮からわかるのは、ひとつには師団衛戍が当地の経済をこれまで以上に潤すが、経済面における師団への依存度も強くなるという点と、もうひとつは師団衛戍による経済効果が軍への支持につながってくるという軍部側の思惑です。

当時、新聞では軍縮要求と軍部批判が盛んに行われ、人びとの間では反軍国主義の風潮が広がっていました。そうした中、四個師団（第十三「高田」、第十五、第十七「岡山」、第十八「久留米」）の廃止と約3万4000名の将兵、軍馬六千頭の削減に踏み切った陸軍大臣宇垣一成は日記の中で、「…部隊の廃止が如何に地方（軍隊用語で一般社会を指す）的の利害に痛き感響を及ぼすかを国民に自覚せし「め」たのである。恐らく今後は師団減少などの声は…国民の声としては起るまい」（大正14年5月1日）と綴っています。この宇垣の思いは、地方都市にとって師団や聯隊の衛戍がどこまでも大きな存在だったことを物語っているとと言えるでしょう。



現在の宇都宮地方合同庁舎の位置に建てられていた師団長官舎（個人蔵）

《主要参考文献》
 宇都宮商工会議所史編纂委員会編（1944）『宇都宮商工会議所五十年史』
 宇都宮商工会議所史編纂会
 栃木県立博物館編（2006）『名城 宇都宮城（企画展図録）』栃木県立博物館
 野中勝利（2014）『1890年の「存城」の払い下げとその後の土地利用における公園化の位置づけ』
 『都市計画論文集』49（3）『公社』日本都市計画学会
 松下孝昭（2013）『軍隊を誘致せよ』吉川弘文館
 『老日記』『武大日記』『伍大日記』
 （防衛省防衛研究所蔵）
 『下野新聞』